

# 棚田の景観に対する意識に関する調査研究

～日本人と中国人の比較を通して～

1 G 0 4 J 0 5 9 - 6 陳 平<sup>Ω</sup>  
CHEN PING

近年、世界各地の農山村地域において、人が生活を通じて自然と関わり合う中で形成されてきた棚田・里山といった景観の保護に対する要請が大きな高まりを見せている。身近な自然地域として最も馴染みの深い棚田・里山は環境の保全及び災害の防止ばかりでなく、今はふるさとを代表する風景の代名詞ともなり、観光の在り方が多様化する傾向にある中、都市と農村との様々な交流の場として新たな役割が期待されている。

本研究では、日本及び世界における棚田の現状を踏まえ、具体的に雲南省南部亜熱帯山地におけるハニ棚田の文化的景観の概念、特徴、構造、機能及びを示し、歴史、文化背景、景観形成などの視点からの分析によって、棚田の文化的価値を明確にする。また、棚田に対して、日本人と中国人がどのようなイメージを持っているのかということとその考え方の違いおよびその違いが起る原因を明らかにすることを目的とする。

*Key Words:* ハニ 棚田 文化的景観 イメージ 意識 比較

## 1. 研究の背景と目的

### 1-1 研究背景

文化的景観、自然的景観とそれを保護することは世界的に非常に注目されている。日本において棚田については、農林水産省がその保全に向けて新たな施策を始めたのに呼応して、いわゆる千枚田と呼ばれる棚田が所在する市町村の首長が中心となって「日本棚田（千枚田）連絡協議会」を組織し、棚田の保全による地域の活性化を掲げ毎年「棚田サミット」を開催するようになった。このような棚田は「棚田百選」にも選定されて広く知られるようになり、多くの人々が美しい風景を求めて各地の棚田を訪れるようになった。

一方、世界遺産の分野においても「フィリピン・コルディレラの棚田」が世界遺産一覧表に登録されたのを契機として、稲作などの「農林水産業に関連する文化的景観」（以下、「文化的景観」という）が注目されるようになった。

世界遺産における近年の動向とも呼応して、中国においては、今日の社会構造や国民の意識の変化を受け、有形・無形を問わず、歴史的価値や文化的価値を有する棚田を広く文化遺産として捉え、新たな保存・活用の対象に加えていく考え方が強くなっているが、その中で「文化的景観」はその重要な概念の一つである。

第二次世界大戦後、環境問題の悪化につれて、多くの景観は危険に臨んでいた。棚田（文化的景観）

は人間が土地を利用する歴史と遺跡の証拠、土地を利用し続け生きた見本と考えられ、人類が大自然と接触すること及び大自然の魅力を楽しむ機会を提供する。このために、景観を保護することは重視されている。しかし、中国においては、集落の民家の景観や田舎文化景観、都市と大自然の景観との繋がる主要な研究内容であり、棚田文化的景観保護の研究に関連して比較的欠乏している。

中国人である筆者は初めて世界文化遺産の棚田文化的景観を見たときには、ただの農村稲作のイメージのみがあった。

### 1-2 研究目的

本研究では、日本及び世界における棚田の現状を踏まえ、中国雲南におけるハニ棚田の文化的景観の概念、特徴、構造及び機能を示し、歴史、文化背景、景観形成の視点からの分析によって、棚田の文化的価値を指摘する。また人々が棚田に対して一体どのような理解を持っているかを明らかにすることを目的として、特に、中国人と日本人また棚田周辺に住んでいる人と住んでない人、および棚田を知っている人と知っていない人といった違いによって棚田に対するどのように異なるかを明らかにする。また、それらの違いが起る要因を分析する。

そのため、雲南ハニ棚田を対象として現地で、または日本の棚田に住んでいる日本人にアンケートを行う。

<sup>Ω</sup> 早稲田大学理工学部社会環境工学科 景観・デザイン研究室4年

## 2. 研究の概要

### 2-1 既存研究

①赤坂他：「日本の文化的景観 農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書」(2003)

日本における「文化的景観」の保存・整備・活用に関する諸課題について総括的な検討を行った。「文化的景観」の特質を抽出し、それに基づき「文化的景観」に関する基本的な考え方を整理する。

②農学家 徐光啓：「農政全書」

中国人の目の中に自分が絶景であると思う棚田はどんな印象が残っているかという研究を行った。

③呉家緯：「国際観光に影響を与えるファッション・タウンの生活像 一台湾女性から見る代官山の生活と風景を通して一」(2006)

約500人の台湾人女性に東京に関する考えと東京観光に対する意識についてアンケート調査を行った。アンケート調査において、選定した9ヶ所のファッション・タウンを対象に、イメージ調査を行った。

### 2-2 研究の方法

中国雲南省元陽県城南沙南部43キロの位置する面積、8737haのハニ棚田を事例としてとりあげる。まず、ハニ棚田の文化的景観の形成原因とその特徴、構成及び機能を示す。また、世界棚田の歴史、文化を調べたうえで、その価値を明らかにする。既存研究②を踏まえ、アンケートによって中国人の視点から見た文化的価値を持っている棚田に対するイメージ調査と、日本人の考えとの違いを明らかにする。そして、棚田に住んでいる人と住んでない人および棚田を知っている人と知らない人などは棚田に対する理解の違いを把握し、その違いの理由を分析する。



写真2. 1 ハニの虎口棚田

本研究の流れは以下の通りである。

#### 資料・文献調査

（「棚田」の定義を明確する。ハニ棚田が例としてその特徴、構成と機能を示し、棚田は歴史、文化背景

及び景観形成の視点から棚田の存在価値を指摘する。）

↓

イメージ調査、アンケート調査の実施  
(主として中国人と日本人にアンケートすること。)

↓

アンケート調査結果の集計・比較分析  
(中国人と日本人が異なる地域に暮らしている人にアンケートすることによって、データを作る。アンケートとデータを分析し、現代化高度発展している世界中においては、“ふるさと”景観の代表の棚田に対する異なる地域に暮らしている人たちの違う考え方を把握する。その考え方の違いが起こった理由を分析する。)

↓

#### 考察・まとめ

(その考え方の違いが起こった理由をまとめる。田畑で労作するみんなの苦労を示し、棚田の景観の重要な意義を指し示す。)

## 3. 対象地の把握

### 3-1 「棚田」の定義

「棚田」の定義としては「棚田学会」に以下のよう定められている。

“「棚田」は、私たちの主食である米を作ることを通して、私たちの生活を防災や水資源涵養などの面から支え、さらには地域生態系の保全や生活文化を維持する機能を、古くから発揮してきた。こうした国の原風景を残す数少ない景観としての「棚田」を、各方面から見直す機運が高まっている。”



写真3. 1 原風景を残す棚田景観

### 3-2 対象地の概況

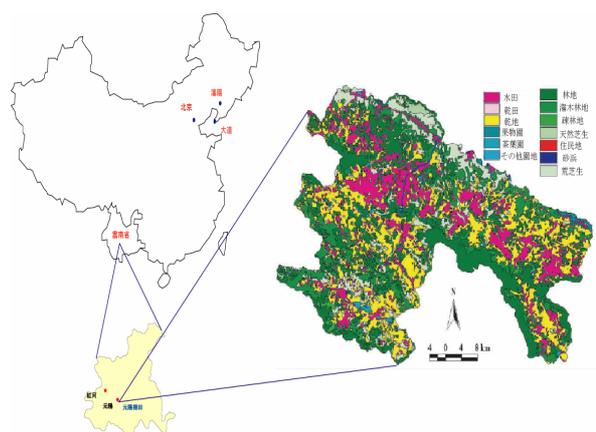


図3.1 ハニ棚田の位置

今から2000年前、中国北西部の青藏高原に暮らしていたある騎馬民族が、雲南省南部の哀牢山脈に移り住み、強い意志と優れた知恵を持って勤勉に働き、現代人をも驚愕させるほどの「棚田」を築き上げた。このもとの騎馬民族が現在のハニ族である。「大地の彫刻」と美称される棚田を築き上げたことにより、ハニ族の生活環境が大きく変化し、遊牧、焼畑の不安定な生活から新しい農耕生活に変わり、民族文化、価値観、人生観なども新たに生まれてきた。これを「ハニ族棚田稲作農耕文明」という。(吳亜民の「大地の彫刻」から引用)

### 3-3 棚田の価値

ハニ棚田はハニ人が多年の農耕実践を通して紅河南岸の特有の自然条件（熱帯、亜熱帯季節風気候）を創造的に利用して、山坂において棚田を開設し稲作農業を営んだ。さらに、ハニ人特有の系統に文化体系を通して森林生態系統、傾斜地生態系統の制御を行い、それがエネルギー転換と物質循環型を形にした景観となった。それゆえ、ハニ棚田は歴史性、独特性、持続性と美学価値の特徴を持っていると言える。

それはある程度の勾配を持っている山地に対して総合的に利用することによって形成されている文化的景観であり、当地の文化の象徴である。



写真3.2 棚田の中にある住居



写真3.3 農民耕作中

ハニ族の棚田稲作は歴史的資料にも記載され、千年間にもおよぶ歴史文化価値が存在する。

### 3-4 棚田の機能

自然に従い天理に順応することは、棚田文化の精神の本質である。ハニ族は今も原始的な精霊信仰を守り、万物は魂を持っていることを信じている。このような原始宗教思想によって一年中様々な祭事があり、その中で最も盛大な祭りが「長街宴」とも言われる「アンマート」で、村の神木を祭ることである。ハニ族の住んでいる所には一つの共通する特徴がある。山の上には森林があり、中腹には村、村から麓までが棚田となっている。「森林」・「村」・「棚田」はハニ族農耕文明の三大要素で、多くの森林に恵まれ、灌漑用水も枯れることがなく安定した田植えが可能となり、棚田の保水機能により、洪水の災害も殆どない。(吳亜民の「大地の彫刻」から引用)

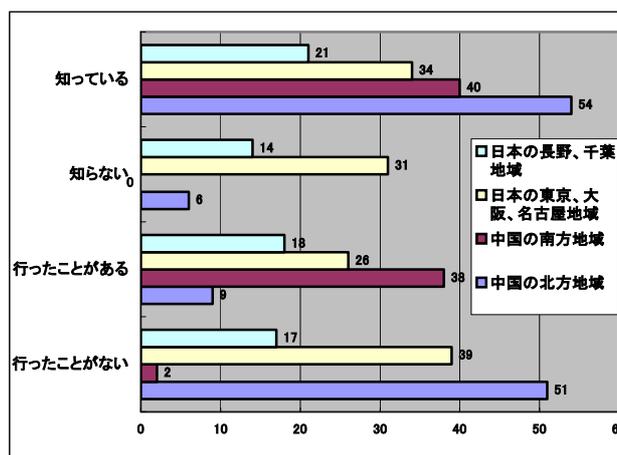
## 4. アンケート調査の結果について

### 4-1 調査対象の項目

今回のアンケート調査は広い範囲で行った。中国の北方は北京、瀋陽、大連三大都市で、南方で主としては雲南省になった。そして、日本の方面では、東京、大阪、名古屋、千葉、長野に住んでいる人を対象として調査した。

表 4. 1 調査対象

国名	地域	年齢	職業	質問人数 (回答者数)
中国	北方	北京	10代～70代以上 学生、サラリーマン、カメラマン、研究者、農耕者、観光者、その他	72 (60)
		瀋陽		
		大連		
中国	南方	雲南		55 (40)
日本	都会	東京	10代～70代以上 学生、サラリーマン、カメラマン、研究者、農耕者、観光者、その他	96 (65)
		大阪		
		名古屋		
	田舎	長野	47 (35)	
		千葉		



(単位：人)

図 4. 1 中国人と日本人対象者棚田認知率と来訪率

#### 4-2 アンケート調査日程及び人員

以下の表の日程通りにアンケート調査を行った。また、ヒヤリング調査は2007年7月～9月の期間で行った。

表 4. 2 地点別アンケート調査日程及び人員

国別	地域	実施期間	実施人員
中国	北京	2007年10月下旬～2007年11月上旬	本人
	瀋陽	2007年11月下旬	
	大連	～2007年12月上旬	
	雲南	2007年10月上旬～2007年10月下旬	
日本	東京	2007年10月～	本人
	大阪	2007年12月上旬	王ら
	名古屋		周ら
	長野	2007年12月上旬	王ら
	千葉		趙ら

#### 4-3 意識の調査結果

##### 1) 棚田についての認知率及び来訪率の調査結果

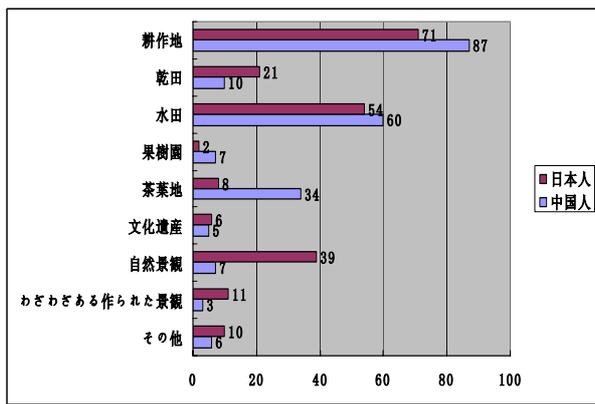
図 4. 1 により、中国の北方地域に住んでいる人でも棚田というものを聞いたことある人が多く、9割を超えた。しかし、棚田景観をわざわざ自分で行ったことがない人の割合が多く、8割を超えた。つまり、棚田景観の実体験はされていない。また、中国の南方地域に山地が多く、水田も、乾田も、果樹園なども大体棚田の形で作られている。そのために、ほぼ南方地域で生まれた人は棚田を見たことがある。さらに、10人ぐらいの人が棚田で働いたこともある。

一方、実際に日本の都会（東京、大阪、名古屋）で生まれた人はほぼ棚田を知らない、現在都会に住んでいる人とあわせて、半分ぐらいの人は棚田を知らない。長野、千葉地域にはやはり水田が多く、棚田を見る機会も多いために、そこに住んでいるひとで棚田を知っているのは6割を占める。また、半分ぐらいの人棚田に行ったことがある。

##### 2) 棚田に対する理解

中国でも日本でも棚田が世界文化的景観、“ふるさと”景観の代表ということを知らない。“田”という文字を見て、大多数の人はただの農作物を植えている場所であるイメージしやすい。

そのために、両国人は棚田に対するイメージについて調査を行った。

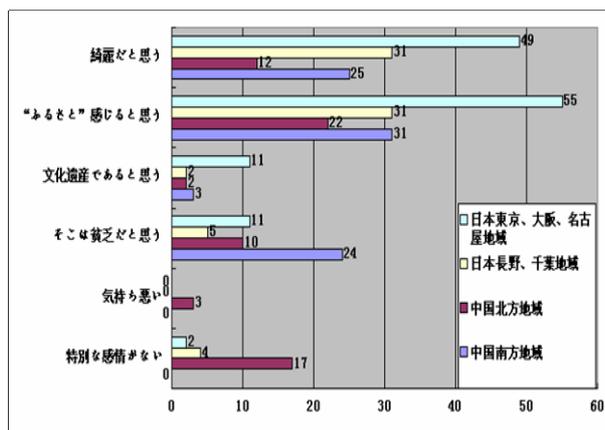


(単位：人)

図 4. 2 国別棚田に対するイメージ比較

図 4. 2 に示して中国人の 9 割近くの人は棚田がただの耕作地だと思っている。棚田は既に世界文化遺産のリストに書き入れられたと知っている 5 人は棚田を研究している人であった。テレビや本の中で間接的に見たことがあるかもしれないが、3 割以上の人にとって棚田は茶葉地のイメージとしてとらえられている。

日本で 7 割ぐらいの人は棚田が耕作地だと思っている。中国人と比べるとその違いは 5 割の人は棚田が的確にひとつの景観として考えられる。アンケート調査の際には、棚田を知らない人に対しては、棚田の写真を見せながら説明した上で答えを求めた。



(単位：人)

図 4. 3 地域別対象者は棚田に対する見方比較

北方住民にとっては、棚田を見る機会がほとんどない。9 割を超える人が北方で生まれた人の棚田について、ただ聞いたことがあるだけで、全然知らない人もいる。そのために、棚田が綺麗な景色だと思っている人も南方住民より北方住民が少なく、12 人だけであった。南方に住んでいる人の 40 人うち 31

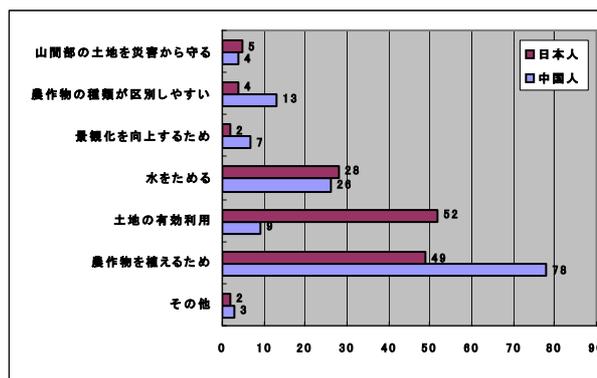
人が棚田はふるさであるという感じを濃く込めている。

文化遺産であるかについて言えば、中国人では棚田に住んでいる人にもよくわかっていない。

一方、日本人はやはり、都会に暮らしている人（田畑に接触できない人）と田舎に暮らしている人（田畑によく接触している人）では棚田に対するイメージが違う。しかし、意外なことに結果としては中国人と逆になった、田舎に暮らしている人より都会に住んでいて、ほとんど田畑に接触する機会がない人のほうが多かった。

都会に住んでいて、ほとんど田畑に接触する機会がなく、棚田が綺麗なものだと思って、“ふるさと” 感じのイメージを頭のなかに残っている。

常識で棚田は当然に農作物を植えるため作られた田んぼである。しかし、平坦な地形がないため作られた棚田にはほかの役割もあると考えられる。その役割を中国人と日本人それぞれどのように認識しているかということ調査を調べた。



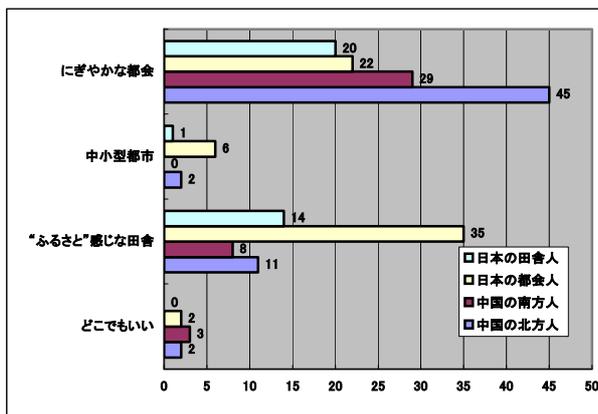
(単位：人)

図 4. 4 中国人と日本人が棚田の役割への理解比較

図 4. 4 によって、棚田の役割に対する両国の人が土地の利用の視点から見た場合の違いがはっきりわかる。5 割以上の日本人は山地における棚田が土地の有効利用の典型だと思っているが、中国人として見ると、大体ただ農作物を植えるためだけであると考えられている。さらに、13 人の中国人は棚田の形状から見て、農作物の種類を区別するために作られた耕作地というイメージを残っている。

3) 周りの生活環境の求め

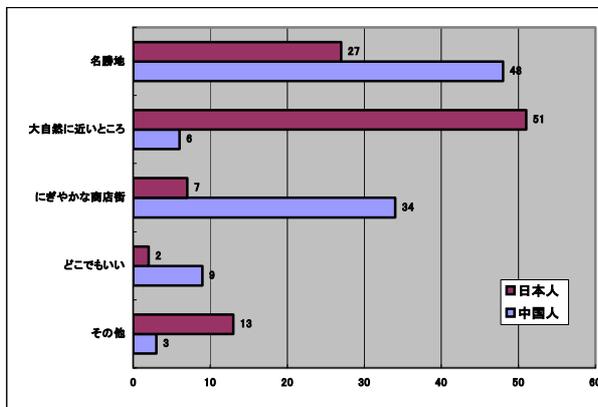
途上国という中国の都会と田舎にも発達国という日本の都会と田舎にも暮らしている人々にとっては、物事に対する理解と見方はそれぞれ違っている、当然に周りの生活環境の求めも違う。



(単位：人)

図4.5 地域別現代人として一番住みたいところ調査

今現在途上国である中国において多くの中国人は東京、ニューヨークのような世界的な大都会に憧れている。そのため一番住みたいところはやはり交通便利、経済が発達、文化的な大都会となる。しかし、従来のにぎやかな、うるさく、空気が混濁している都会に暮らしている人々にとっては当然に静かで、空気が新鮮である“ふるさと”といった感じを込めている田舎に暮らしたいと考えられる。



(単位：人)

図4.6 国別休暇を過ぎるときに最も行きたいところへの調査

図4.6により、顕著な違いとして見えている。ほとんどの日本人は休みのときに、大自然に近いところへ行きたいと考える。それは5割以上を占める。その他、休みの日に自宅で自分の好きなことをやると思う人は10人いる。やはり、日本人にとって静かなところや自然に近づくほど自分はリラックスできると考えられている。中国人としては、近い商店街でショッピングや名勝地へ旅行するほうが多く、8割に近い。つまり中国人にとっては、にぎやかなと

ころや新鮮なところで過ごすことが愉快なことであると思われる。

### 5. 考察・まとめ

大多数の中国人と日本人の生活環境により、そして、途上国と先進国の違いを考えて、両国人が面するものを比較して、やはり両国人の生活リズムが違って、目の前の求められているものも違って、もちろんあるもの事に対する意識も違ってくるので、さらに棚田の景観に対する意識も違うというように考えられる。

ただし、毎年棚田に観光する毎年の旅客数から見ると、“ふるさと”景観の代表の棚田景色は既に中国人にも注目されている。

また、棚田は人類が多年の農耕実践を通してその特有の自然条件を創造的に利用して、山坂において棚田を開墾し稲作農業を営んだ、それに、当地人が自分特有の系統立っている文化体系を通して森林生態系、傾斜地生態系に対して制御した、それをエネルギー転換と物質循環型の景観になった。山地の自然条件を十分に利用し、形成されている文化的景観であり、当地の文化の象徴である。さらに、狭い土地を囲みこむようにして、機械類を使うことが難しく手作業で稲作を行うのは人たちの苦勞を感じた。

### 6. 参考文献

- (1) 日本の文化的景観 農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書、文化庁文化財部記念物課監修、同成社
- (2) 「元陽棚田」 李晋文 世界人文地理サイト (2007)
- (3) 「農政全書」 徐光啓
- (4) 「国際観光に影響を与えるファッション・タウンの生活像 一台湾女性から見る代官山の生活と風景を通して」 呉家緯 2006年度修士論文集
- (5) 「棚田の自然景観と文化景観」 春山 成子
- (6) 「大地の彫刻」 呉亜民 2004年
- (7) 文化庁ホームページ  
<http://www.bunka.go.jp/index.html>
- (8) 「元陽棚田撮影旅行」
- (9) 棚田学会ホームページ  
<http://www.tanadagakkai.com/>
- (10)  
<http://www.unnantour.com/kouka/genyou/map2.htm>